

## ピカソとその時代 ベルリン国立ベルクグリューン美術館展

国立西洋美術館 22. 10. 08～23. 01. 22 国立大阪美術館 23. 02. 04～05. 21



「ハインツ・ベルクグリューン」(1914～2007)は、ドイツ生まれの美術商で、1950年からパリで画廊を経営しながら自分自身のために作品を収集し、世界有数のコレクションを作り上げた。

その多くは1996年以後、生まれ故郷のベルリンのシャルロッテン宮殿に面した建物の中で公開されている。これらのコレクションを納める施設は、「ブルクグリューン美術館」と改称され、現在はベルリン国立美術館群の一翼を担っている。

本展は、まだ見たことのない「ピカソ35点」が本邦初公開され、ブルクグリューン美術館の開館以来、主要作品がまとめて国外に貸し出される

のは今回初めて、来日作品「97点」の内「76点」が日本初公開されている。

パブロ・ピカソ 《緑色のマニキュアをつけたドラ・マール》1936年 上図  
モデルの「ドラ・マール」は、フランス生まれのシュルレアリスム系統の写真家・画家で、ピカソの愛人の一人でもあり、正妻の「オルガ」とは不仲で、もう一人の愛人が娘を出産したばかりで3人の女性の争いが繰り広げられた。

この複雑な家庭状況であるが、「マール」は持ち前の美しさと知性で「ピカソ」の心を掴んだとされ、この時期に興味深い作品を生み出している。

作品はモデルの横顔を描いている筈であるが、向かって左目は正面を向いて、鼻の孔が2つ見えており、物を見るためには瞬間的に見るだけでなく、頭で認識する時間が必要と気付いたキュピスム(立体主義)の手法が表れている。

他の展示作品は、「アンリ・マティス」「ポール・セザンヌ」「パウル・クレー」「アルベルト・ジャコメッティ」「ジョルジュ・ブラック」である。

ポール・セザンヌ 《ポントワーズの橋と堰》1881年 油彩/カンヴァス



画伯は、パリ郊外の街並みと田園風景が融合した町「ポントワーズ」で、10年程画家「ピサロ」と多くの時間を共有して多数の風景画を制作した。その経験は、それまで陰鬱な主題を暗い色調と重い筆触で描いていたが、明るく軽快な作風へと導き、水面から橋、丘、空に向かって積み上げられた構図と筆触は独自の様式を顕著に示した。